

する。なお第4図中黒く塗りつぶしてある部分はAIC差が正であって、その格子点を加える意味のないことを表す。

次いでこの5点から任意の数の任意の組合せを取り出して、その全てについて重回帰およびファジィ解析する。そのなかのAIC最小のものをモデルとして採用した。5月だけは例外として、 $50^{\circ}\text{N}/140^{\circ}\text{E}$ ,  $30^{\circ}\text{N}/140^{\circ}\text{E}$ の代わりに $60^{\circ}\text{N}/140^{\circ}\text{E}$ ,  $30^{\circ}\text{N}/160^{\circ}\text{E}$ を採用した。AIC最小で採用したものは全てファジィモデルであって、ここでもファジィ解析の優れていることが示された(第4表)。各月のファジィモデルによる相関係数と、同じ格子点による重回帰モデルの相関係数は、6指数による重回帰モデルの相関係数とともに第3図に示してある。図中斜線部はファジィ解析によって相関係数の改善された部分である。

採用されたファジィモデルでは相関係数が最小でも0.85、平均で0.9程度となり月平均地上気温は500mb高度偏差により、かなりよく説明されるといえよう。

## 6. おわりに

ファジィ測度を用いる多変量解析の手法は幾つかの事例に適用して有効性が実証された。一般に、線形回帰

より一歩進んだ近似法として応用することができよう。結果的に線形回帰で十分であるということももちろんある。真実の関係が線形であったり、関係が希薄で相関が悪くデータ数が十分でないという場合などがその例であるが、この方法は線形回帰を特別の場合として含み、かつ最終的には赤池情報量基準AICによりモデル選択をするのであるから、線形回帰分析をしようとするときはそれに代えてこの方法を試してみる価値があると思われる。

なお規格化については、説明変数の与えられた数値を線形で使うよりももっと適当な変数への変換が見いだせるならそれを使うことによってさらによりモデルがえられるであろう。

## 文 献

- 赤池弘次, 1989: 事前分布の選択とその応用, ベイズ統計学とその応用, 鈴木雪夫・国友直人編, 東京大学出版会, 81-98.  
菅野道夫, 1987: ファジィシステム入門, オーム社, 131-138.  
菅野道夫, 1988: ファジィネスの理論—二つのファジィネスをめぐる—, 日本物理学会誌, 43, 834-840.



## 研究会「流体中の非線形波動の数理的側面」講演募集

平成3年度の京都大学数理解析研究所の共同利用研究計画の一つとして、標記の研究集会在開かれます。

この集会は、流体力学、応用数学、気象学、海洋学、土木工学、物理学などの異なる分野で「流体中の非線形波動」に関心を持つ研究者に議論の場を提供し、今後の研究の発展の方向を探っていくことを目的とするものです。

次の要領で講演を募集いたしますので、ふるって御応募下さい。

開催日: 1991年11月18日(月)~20日(水)

会場: 京都大学数理解析研究所

講演申込み締切: 1991年9月30日(月)

申込み要領: A4版用紙に、1) 題目、2) 講演者氏

名、3) 所属、4) 職名あるいは学年、5) 連絡先(電話番号も)、6) 要旨(100字程度)、7) 旅費希望の有無(御希望に沿えない場合もあります)、を御記入の上お申込み下さい。

申込み先: ☎816 福岡県春日市春日公園6-1

九州大学大学院総合理工学研究科大気海洋

環境システム学専攻 久保川 厚

電話 092 (573) 9611 内線372

FAX 092 (592) 8447

又は九州大学応用力学研究所 及川正行

電話 092 (573) 9611 内線582

FAX 092 (582) 4201



## 第1回 Pacific Ocean Remote Sensing Conference (PORSEC) の御案内

パシフィック・オーシャン・リモートセンシング・コンファレンスは、人工衛星に限定しない、水中音響、光学、ブイ等も含めた広い意味でのリモートセンシング技術を開発し、またその技術を海洋科学へ応用することによって、太平洋における海洋物理学、海洋化学、海洋生物学、気象学に関する様々な地球環境現象の解明を目指すものである。

アジアや南アメリカの国々は、リモートセンシング技術を学び、それを純粋な地球科学の進歩のみならず、沿岸海洋資源や環境のモニタリング（例えば、海洋や大気の汚染）に関する工業問題や社会問題の解決に応用することを強く望んでいる。従って、当コンファレンスの第一の目的は、これらの国々の科学者や技術者にリモートセンシング技術を紹介し、その国の人々がこの技術を用いることが出来るように援助することにある。

一方、J-GOFS, TOGA, WOCE, のような国際研究プロジェクトは、全地球的規模の調査の推進をはかり、

リモートセンシングの技術を全地球的な現象のモニタリングに応用することが、必要不可欠となっている。従って、第二の目的は、リモートセンシング技術を用いて地球環境や海洋資源の調査の実態と機構を明らかにすることにある。

日時：1992年8月25～30日

会場：沖縄県・沖縄コンベンションセンター

☆『論文を募集します!』

題と簡単なアブストラクト（英文 200 WORDS）を1991年7月30日までに事務局まで御応募下さい。

その際、詳細は下記事務局までお問い合わせ下さい。

事務局：〒424 静岡県清水市折戸 3-20-1

東海大学海洋学部

海洋工学科内

PORSEC 事務局 岡田

(0543) 34-0411 内線3422

編集後記：「天気」とのつきあいは学生時代以降であるが、研究機関に比較的長くいたせいか「天気」は「気象集誌」同様、論文投稿主体の専門誌との認識が強く、これまでは興味ある論文や解説記事に主として目が向いていたように思う。しかし、年齢的にも中堅（中年？）となり、また、昨年つくばから大手町に転動したこともあって行政的な視点から読むようになると、興味の対象は自ずと他の記事にも移ってくる。

“会員に役立つ学会誌”という、これまでのそして現編集委員会の基本方針が反映されてきたためであろうか、「天気」に掲載される情報も多様かつ多量となり、数年前に始まった「素顔シリーズ」、「研究機関めぐり」、「情報ファイル」から最新企画の「カラーページ」まで興味は尽きない。

さて、ここ数年来、海外での国際会議やシンポジウム

への出席者が年々多くなり、また、気象学の研究対象もグローバルとなり、国際共同研究にも多数参加してきている。これらの報告は、「シンポジウム」や「海外だより」などで紹介されるが、これらの記事は世界中のアクティブな研究活動を出席者の新鮮な目を通じて伝えてくれるのでとても楽しみにしている。多数の出席者が記事を寄せて書いているものはそれぞれの個性が出て特に興味深い。この意味で、この4月から編集を担当している「シンポジウム」の原稿にいち早く目を通すのは担当編集委員の楽しみのひとつである。担当委員としては、多数の会員が積極的に投稿してくれることを望むが、強いて一言苦言を呈するならば、やはり分かり易い（やさしいという意味ではなく論理が明解な）文章を書いていただくことを期待したいものである。（戸矢時義）